

&lt; 2017年 9月 &gt;

古賀 順子

## 「文化遺産の日」

夏のバカンスも終わり、9月のパリに再び日常が戻ってきました。9月は学校の新学期だけでなく、文化講座、スポーツクラブ、オペラ・コンサート・演劇など、来年6月までのシーズンが始まります。そして、今年は9月16日(土)・17日(日)の週末が、秋の風物詩「文化遺産の日」でした。

正式名称は「ヨーロッパ文化遺産の日」(les Journées européennes du patrimoine)。1984年フランス文化省の提案で発足し、エリゼ宮(フランス大統領の邸宅)、リュクサンブール公園内の上院、国会議事堂、裁判所、天文台、お城など、普段は入れない歴史的建造物を広く一般に知ってもらうための無料見学の日を定めたのが始まりです。その後、1991年、フランス国境を超えて、ヨーロッパ議会の賛同を得て、今日ではヨーロッパ全体に広がる文化の日となっています。地元の歴史や文化を知ること、文化遺産を大切に保存していこうという意識を養う行事です。

現職マックロン大統領が迎えるエリゼ宮は大人気で、朝から4-5時間待ちの長蛇の列。私は、比較的人の少ない「パリ市庁舎」を見学に行きました。

セーヌ川を隔てノートルダム寺院を見渡すことができるパリ市庁舎には、長い歴史があります。現在は、19世紀に再建されたルネサンス様式の立派な建物ですが、起源は14世紀に遡ります。フランスとイギリスの間で起こった百年戦争(1337-1453)の最中、フランス王「善良王ジャン(即位1350-1364)」の財務行政官がエチエンヌ・マルセル(1302-1310年の間に生まれ、1358年パリで暗殺される)でした。エチエンヌ・マルセルは、河川貿易を独占していたパリの裕福な商人たちで構成される財務官長で、1357年、グレーブ広場にある「柱の家」と呼ばれる小さな館を購入、パリの商人組合の本拠地とし、フランス王家に対峙するパリ市の基を築きます。「善良王ジャン」はイギリスの捕虜と

なり(1356-1360)、エチエンヌ・マルセルは、王の莫大な身代金を都合しますが、混乱するパリで暗殺されてしまいます。

その後、フランソワ1世統治下(1515-1547)の1533年、パリに相応しい市庁舎にすべく、「柱の家」を取り壊し、ルネサンス様式の建築が始まります。市庁舎を設計したのは、フランソワ1世がイタリアから連れてきたコルトーナ生まれのドメニコ・ダ・コルトーナ(1464-1549)で、フランスでは「ボッカドール」と呼ばれ、フランソワ1世の狩の館シャンボール城を設計した建築家です。カトリック教徒とプロテスタント教徒が殺戮を繰り返す宗教戦争の時と重なり、パリ市庁舎の建設は遅れ、1628年、ようやく完成に至りました。1789年フランス革命が起こり、ルイ16世がパリ市庁舎で、初代パリ市長となるジャン＝シルヴァン・バイリー(1736-1793)に三色帽章(ブルボン王家の白、パリを象徴する赤と青)を授与し、市庁舎は「自由のシンボル」となります。

19世紀に入ると、当時の知事ランビュトー伯爵(1781-1869)により、1837年から市庁舎の増築が行われます。ランビュトーの後を継いで、第二帝政期のオスマン公爵(1809-1891)が、1865年以降、アングルとドラクロワを登用した装飾に着手します。

しかし、1870年プロセインとの戦争に端を発し、フランス各地で蜂起した史上初のプロレタリアートによる自治政府を宣言した1871年のパリコミュンにより、パリ市庁舎は放火され、焼け落ちました。再建が直ぐに始まり、ルネサンス様式の正面がほぼ再現され、今日に至っています。パンテオンやソルボンヌ大学の大講義室を飾った象徴派ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ(1824-1898)の『冬』(1891)と『夏』(1891)の間を通して、「アーケードの間」「宴の間」「図書館」を経て、市長の執務室を見学し、「たゆたえど沈まず」(パリのモットー)の言葉通り、波に揺れ、航海する船の精神を持った長いパリの歴史を、また少し知ることができました。

パリ市庁舎「アーケードの間」(撮影：古賀 順子様)

